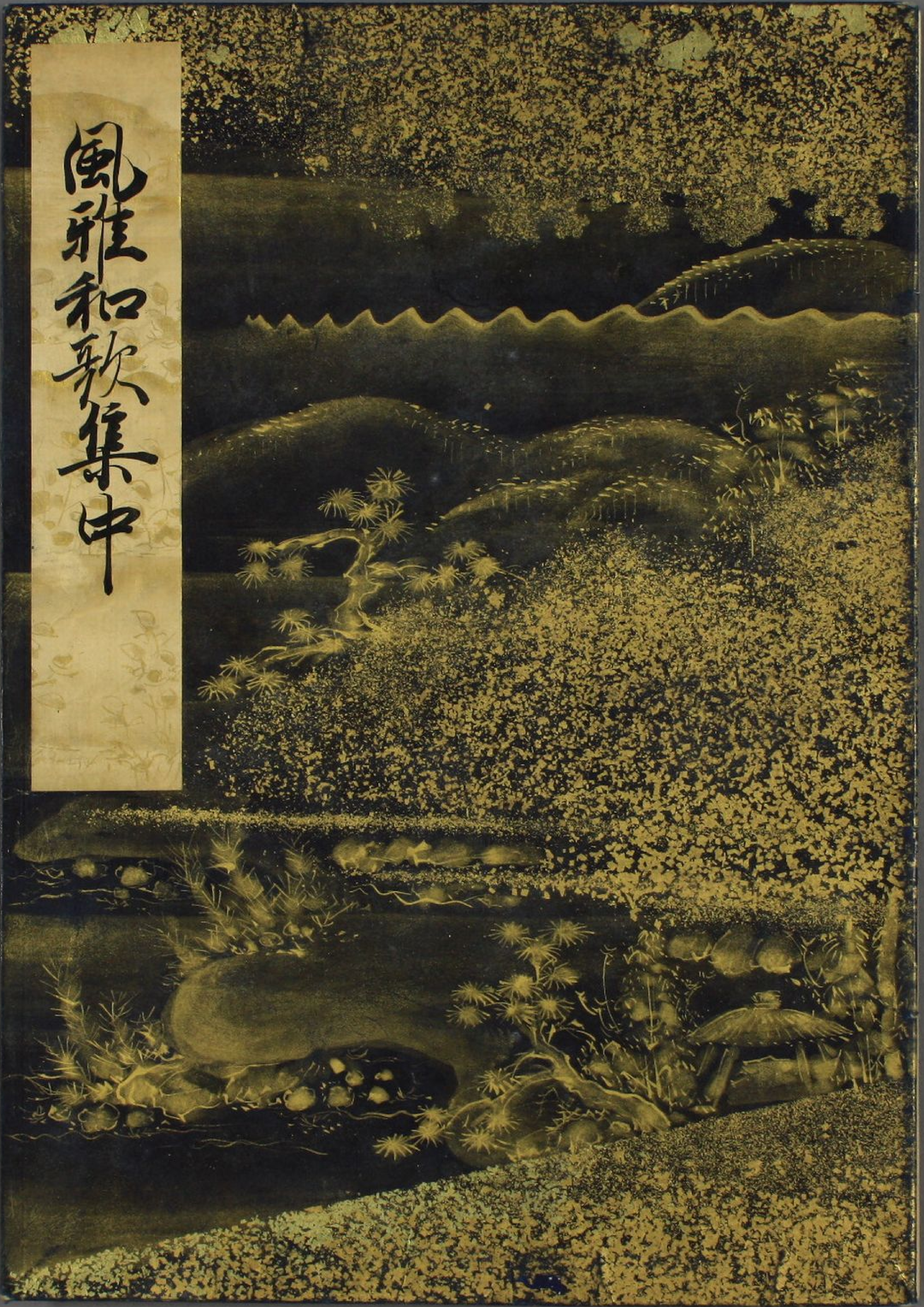
風雅和歌集　中



九曜文庫

風雅和歌集巻第八

冬哥

十月一日おほ井にまかりてこれかれ哥
よみ侍るに　前大納言公任
おちつもる紅葉をみれは大ゐ川ゐせきにとまる秋そ惜しけれ
枯初冬といふ事を
後光院入道前関白太政大臣
冬はきて霜のふりはも多し秋も老そめりのまの下草
百首御哥の中に
後二条院御哥
もみち葉の見し山にふくあらしは秋のかたみもちりやはてなん
初冬の哥よ
伏見院新宰相
草のまてさひしくなるさ庭の面に紅葉ちりしき菊も咲ける
後西園寺入道前太政大臣
うき雲は秋より冬にうつりきてたえすしくるゝ山の松
時雨を
太上天皇
中日さしおちてくるにたえて庭のおもてのうき雲のかけ
儀子内親王
山嵐にふきさそふ雲の一とをり日かけされゆく時雨する也
従二位盛親

ふりまさる時雨の空の浮雲にみえぬ夕日の影そうつろふ

文保百首哥たてまつりけるとき

民部卿為定

しくるともよそにはみえし後くふと山をめくる峯の浮雲

冬哥の中に

前中納言為相

時雨ゆくくもまにもれし冬の日のかけろひあへぬほとそくれぬる

伏見院五十番哥合に冬雲を

前大納言家雅

まきてゆく雲は嵐にきえくらみてしくるる山の夕日かけ

時雨をよめる

前参議教長

時雨をはなにとふる人根ありての後はことにもまさる

題しらす

進子内親王

山嵐に木の葉落そふ村時雨ふる雲まにはる月の影

後鳥羽院御哥

秋の月雲まにまよふ小雨しほりしくるる比の山風の月

永福門院

月の洩る梢のむら雲ひとそそきはるる時雨そする

権大納言公蔭

秋の月雲のゆくてに村しくれはれてもくもるよはのむら雲

百首哥合に同時雨を

伏見院新宰相

ありくに河霧としてちさとよりねやの梅乃香まてとをしまま
冬かれ中に
藤原為仲朝臣

と山より河霧て海つらぬ雲に木乃葉ませゆく嵐哉
永陽門院左京大夫

はそひもゝ嵐の後乃夕河霧庭のおちしく松やそむらん
均子内親王崇こさ綿けつ小高綿殊子をとくり
綿きる扉風よりさとり山乃かたそとを命
く雅よ志くれのすゝふ袖とうつさめつ示
大中臣頼基朝臣

かさとり山とたのもしひとおく河霧よ袖とおもしてそめ
藝しらず
従二位為子

河霧ゆく舟一村へもやしてなへのをハ雲そのとけさ
永福門院

むらく小こ松のねかゝ柏乃聲へきさまにしきゝ夕暮の舟
進子内親王

うつりゆくおち葉よかとすゝ風吹まさる夕暮の舟
落葉深とのふとく人くにしまも絶けつゝい
てけり
伏見院御哥

吹分る木のその下そこ乃しつかく庭みをうつる山おろしのかせ

冬庭といふことをよませ給ひける

後伏見院御哥

しもとしもまじりぬ庭は木葉あまてさむき夕日は影落くり

宇治入道前関白家に殿上人とも紅葉を

たつねといふ題をよみ侍りける時

四條太皇太后宮下野

心して風の残せる紅葉を尋ぬる山のかひはありけり

題しらず

貫之

紅葉ゝの流るゝ時は竹河の淵の緑も色かはるらん

山川に紅葉のなかるゝを見て

順

冬上に雨ふらし山川のせきとも紅葉のふかくなる

弘長二年嵯峨にて十首哥講せられける

つのくり河落葉

後嵯峨院御哥

秋霜のならひあらし大井川せきもとゞめすゆく秋の哉

冬御哥に

後二条院御哥

神無月ひと山風のさむけくもちりくらふよの色紅葉

院兵衛督

神無月さえ枯の木葉ちりはてゝおもかげのこれる夕日のかげ

文保三年後宇多院にたてまつりける百
首歌の中に　芬陀利花院前関白内大臣

吹嵐のさそふともなき梢よりおつる枯葉の音ぞさびしき

冬歌とて　権大納言公宗

入相の声をさそふ山嵐よりのこる木葉みだれて過行

後一条入道前関白左大臣

いつのまに昔は人となりぬらん初霜のふる里の庭

百首歌奉りし時　徽安門院一条

妹みしはそれとばかりの荻の枝よ霜の枯葉にて一葉おちる

権大納言資明

冬のはじめの色なれやとばかりみちちる野辺の錦

題しらず　親子内親王

霜さむき朝けの山はすさりてこずゑの雲に日影

冬歌の中に　今上御製

霜こほる竹の葉分に月さえて庭しろたへの冬の夜半

権大納言公蔭

吹よわる梢の風は有明にさえてさゆる霜よに星清き空

冬動物といふことを

藤原為基朝臣

かく霜はねやまてとほるらん枕にちかき竹の一こゑ

霜を　　紀淑文朝臣

晴つゝく峯の日影もくれはてゝ又霜さむきをちの山里

前大僧正源恵

くもりゆく日影はさらに消そめて又霜こほるまゝの下草

百首哥奉し時　　前大納言實明女

空たかくすみとほる月は影さえて芝生に白き霜の明ぼの

冬哥に　　祝部成茂

紅葉をはさそひしいまは白妙の霜のふちにも月そやとれる

三條入道前太政大臣

草はゝやかれそふ霜にあらはれてなかなかまさる宿の冬そ

寒草をよめる　　前大納言實教

かれまさる秋のなこりの草のうへにやゝあらはるゝ霜の下

建仁元年三月哥合に嵐吹寒草といふことを

前中納言定家

あさちふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を吹嵐哉

冬哥の中に　　従二位家隆

霜志ろき袖のとりねにおさ鳥のなくねもさひし外山のさと

後伏見院中納言典侍

霜とくる日影の庭は木葉ぬれて梢よりしも冬そ又さえかへる

後京極摂政左大将に侍ける時家に六百番
歌合し侍けるに残菊
正三位経家
さもこそは籬の菊の紫は冬にうつろふ色にこそきけ
人〻に歌よましめてあはせられ侍けるついでに
庭残菊といふことをよませ給ける
後宇多院御製
庭の面に老のともなる白菊はむそちの秋や移さるらむ
菊と月とをよめる
藤原道信朝臣
こ紫うつる菊は白露の妹のこゝろにかけてあるまそり
文保百首歌の中に
前大納言為世
冬されはいかゝる嵐の山かせにおとろけて出る月影
百首歌奉りしに
正二位隆教
おちかたの光をさしも霜とみえてさむき夜に宇治の月影しらす
儀子内親王
吹とほす尾上の風は月にしみて霜さへさゆる秋の夜の月
二品法親王覚助
なかき夜の霜の枕は夢なくて嵐の音にあかす月影

冬雲を

徽安門院

こほりとはみえしひかりも月のおもかげくもる雲まよひき

河辺冬月

冷泉前太政大臣

武士の八十うぢ河の冬の月いざよふ波にかけてたえなん

藤原為秀朝臣

瀬をあしろふる川のこほらずおとこそかはれみつゆく月影

題しらず

後伏見院御歌

冬の夜もとにあかしとおきてみき霜夜の月ぞさやけかりける

左近中将忠季

有明の月と霜とみえたちにおきつゝしほるそでもひえそめつ初かな

冬鐘といふ事を

前大納言為兼

吹さゆる嵐のつてに二声はまさしきこえぬ暁の鐘

暁かたに千鳥のなくをききて

増基法師

暁やちかくなりぬとおもふらむねもなく浦のしほかぜに千鳥そとよみ鳴けり

左京大夫顕輔

あはぢや野しまがさきの浦風に夕波千鳥声さわぐ也

寛治百首中に浮千鳥

正三位經朝

夕霧に風あらくなるみかた方も定めぬ鳴千鳥かな

海邊千鳥といふことを

平宣時朝臣

すゝめたるさとのひらみさよ千鳥みちくる汐に声そちかつく

寒蘆を

權中納言通相

難波えの入江よさむき夕日影残るもさひし蘆の村立

寂蓮法師

みなと入の棚なし小舟跡みえて蘆の葉むすふうすこほりそある

後西園寺入道前太政大臣

ゆきさむみ芦の枯葉の下むすふこほりのよみなかさゝら水そすくなき

惠助法親王

冬ふかみ岩根の下のいたしておちくる水のおとそねこりし

冬哥の中に

前關白太政大臣基

こほりくなとおやまとの大井川さゆる嵐の山蔭にして

百首哥奉りし時

藤原為忠朝臣

風さむき山陰なれはなつ川もむすふこほりとくる日もなし

冬哥を

永福門院

さむきさよふかくはれ盤の床よ凌きて山松風の音なをせきく

冬夕のやとをまを世絶けり

伏見院御哥

梢には夕あらしふきてさむき日の雲にしくるゝ

正治百首哥の中に

式子内親王

むすひてあかつき雪をふきはらふ松の峯より落る嵐

霞を

前中納言為相女

見さむる雲けりよ花とる山の世の雲のゆくさにに霞たる也

前中納言重資

風のたつともはなれさる夕日みる雲一むらに霞あり也

野外霞といふことを

後三条院入道前内大臣

霞ゆく野辺のをちかた風さえてなかりも春にとふ霞

正治百首哥の中に冬哥

式子内親王

さえつゝも松葉はふりて霞そたつ庭の朝霧よ

題しらす

前大納言為兼

ゆかりて庭の霞はあさくうりて色なる雲にあそ雁

冬歌とて

伏見院新宰相

夕月の風のさえてかへるさる霞をそさく

霞を

権僧正永縁

冬のよはなきよさけかくし雲のうへの梢にも霞ふるかな

百首哥奉りし時　民部卿為定

春あさつそとものならぬ廣葉にもこほりてよそにたつ霞

題しらす　章義門院

なかめやるをちの柳は枝さひく雲まつ空に霞そさそふ

藤原為基朝臣

浮雲の時雨はしてつるかよふ雲間の影の山かせ

百首哥の中に　徳大寺右大臣

まきもくの檜原のゆふしらえていつきさら嶽に霞なり

建仁元年三月哥合に霞似白雲といふことを

後鳥羽院御哥

雲やこれ猶たまれ山のせにつまこかさき雲乃峯の霞ろ

家にて窓前竹聞新雪といふ心を

前中納言定家

初雪の窓の呉竹ふしなからをもる上葉のほとそきこゆる

題しらす

前中納言雅孝

ふりきるとも去ぬ秋のへみてやそおちたえにしさ庭のちす雪

道命法師

庭のさく霜とこれはをのへの松の白きけさ風雪

藤原朝定

はな葉のうへにはふりをけと色もかくれぬ里のうす雪

院冷泉

ゆふ日てらすまね霧そすさましさえて志からの里はうす雪

寂恵法師

朝日影さすや雲ゐるおろしふくかつもこすゑの風の白雪

冬哥に

右近大将道嗣

いつくともわかたの山はみえねとも雲のなかくふれる白雪

野雪といふことをよみ侍ける

内大臣

きよ見にはまたぬかうへにやうつりけん富士の煙そ野への初雪

行路雪と

藤原為秀

旅人のゆく跡はおほへてゆくさきもみちをはゆつるふる雪

左兵衛督直義家の哥合に

藤原重能

波のおとのきこえはさしていその松梢につもりし雪

雪ふりける日日吉社へまいりて侍けるにやまぬ

くもらぬまにも風吹おろしてさえもみと雲のちるむらひかれし

前大納言為兼

於さへハ雪ふかくこすゑもはるかにて雲にまかふる志かの山みえ

題しらす　徳大寺左大臣

こやまにハ白雪ふりてしら(?)きえ桂の枝に人のあとたえし

山家雪　基俊

雪のちにふみもとたえつ山里ハ住木の煙あらそひて

文保百首奉りける時冬歌　民部卿為定

ふりまさるひかりもいとゝこそみえけれ初瀬の山ハ雪つもりつゝ

百首歌合に山雪を　永福門院

嶋の松乃嵐もいとゝ世をかけて山志つかなる雪ふかくハれ

雪の音そよむ　津守国夏

三吉野やよそに吹なるつりまて桂もしけく峯の雪の朝風

雪埋樵路といふことを　俊恵法師

妻木こる山路ハ雪ふかけれハ世にふる跡も絶やしぬる

雪のいみしく降りける朝慶政上人許

山ふかみ住ける庵室にふりまさてつもる雪

光明峯寺入道前摂政左大臣

いかはかり峯つゝきにもしもやさえぬらん谷乃志つ雪

又一　慶政上人

君か代のみちある山にふりまさる雪の積りしを

今動(?)るふこりまて待けつ法雪に都藤原為家

まつかしけつ　前大僧正道玄

教へもこのみちのりのいとにきもとたえそつきみ村の白雪

返し　藤原為家

なさむつきそみなむ山ともかれけれ教も雪かかなまとかなる

跡しら波　権中納言家経

ともへの縁によせめぬ松風の音さへあはゆく山の白雪

藤原頼氏

降つもる梢の雪やこのほとん鶴白をいはね庭の松かえ

建保五年四月庚申に冬夕と

西園寺入道前太政大臣

山のまか雪の光よる宿と見て冬の日数も今そ久しき

雪をよみ侍けり　従二位兼経

ふりつもる都の松の葉もえせぬこそなる音に雪の嵐

三島社によせてたてまつりける平貞時朝臣

あしめ侍けり十首歌の中に松雪を

前大納言為兼

山おろしの梢の雪を吹とひも一くりまさする松の下風

雪朝に

前中納言定資

よもすからふる雪なれとたまらぬは嵐やはらふ松の白雪

従三位盛親

冬籠みそれの庭やこほるらん積らてつもるよはのはつ雪

従二位為子

花よりも又千すくなりつる冬の梢に積る雪のあさあけ

院よりめされける三十首歌の中に

永福門院内侍

雪ハふるこほる朝けの春の柳ひとへはなき雪の白糸

冬哥とて

前大僧正道意

朝日さし軒はの雪ハ今消て竹のひろ末におつる玉水

朔雪と云ことを

伏見院御哥

たかのやまさむさ朝日影さしそめてとまとおつる梢の雪

後西園寺入道前太政大臣

嶺も山もひとつにみゆる雪ならす雲まなき朝そ

嚴安門院

うちとくへきもの晴やらぬ朝明の雲にまかふる雪の遠山

院一條

題しらす

み草かくれ水ねぬ念ろむきされ雄とゝ重て鳥鳴之

後鳥羽院御哥

鳥の音もかせそに聞えけり風木ずゑの松の雪や落らん

儀子内親王

うすくもりさむくむら雲にいつとしもなく月もきえ（さえまし）

前大僧正覚忠

ふりはるゝ夕の雲は空晴て竹のは白き新月の色

藤原親朝

吹くるゝかぜもさむく数ふりたる世にかこちかつ夕暮の雲

百首の歌の時

中納言重資

ふりつもる草木よ世の音やみて雪静なる夕暮の庭

冬の歌とて

院一条

山里の竹はむらくらかさなりてゑだもさしき雪のあけぼの

冬地儀といふ事を

左兵衛督直義

見渡せは山もと遠き雪のうちに煙さびしき竹のむら

夕雪

伏見院御歌

降つもる色より月の影よりて夕暮みえぬ庭の白雪

前大納言為兼

今朝ゆくえもしらず梅竹の葉に風よりて雪ぞ降しく

屏風乃絵に雪の降ところ

貫之

み吉のゝ山より雪ハ降くれていつともわかぬ我宿の竹

題しらす　　読人しらす

池のへの松乃末葉にふる雪ハいほへ降しけあすさへも見ん

しら玉のことしの雪にいさゝねん何者鶴よけふハ行えん

貫之

冬ことにふりぬとくとく雪消れと水まハ公ともつゝさ経り

水上雪といふことをよめる

源仲正

緑とも木の名さき擱ハ氷面よこさ山ハ涌の渓の上乃岩

文保三年後宇多院へめされける百首哥

乃中小

二品法親王覚助

ゆりつゝる雪まに落る瀧川の岩ねよりそさきまる白波

水上雪を

従二位雅家

かつむすふ氷の稚もあつかれて雪に加ゆる庭のけり

雪の南りをまけつ鶴つとめて俊頼朝臣を

とふよみゝけるりし巻る

修理大夫顕季

雪ふりて梅まつくれき庭の面ハ跡なく人も構まきり

くへし

俊頼朝臣

我心雪けの空にゆふともこゝろさまよひ行達

正応二年十一月廿八日賀茂臨時のまつり
の舞立まうせ給ひ後上達部殿上人お
ほくさふらひてよもすから歌合なとあ
りけるに宮人へふりていとおもしろ
く侍りけるをおなし五年のおなし月日臨
時祭にて雪深く侍りしかはおもひいつ
る事ありしかはさふらひし宮殿まて浄
妙寺関白そのころおなしく侍りけるに
よませ給ひける　伏見院御歌
めくりあふおなし月日は思ひ出つやよせふりし雪の宮人

返し　浄妙寺関白前右大臣
忘れめやなへてまよふ雪を拂りてさふらひし宮の夜の
冬の夜すからふりしともを
進子内親王
埋れてつもる雪の梢より暁ふかく風のたよりに
朝雪を　覚誉法親王
ふりつもる雪をかさねはのちのよの日けふおつる木の葉雪
雪前の中に　従二位隆教
日影さへみちぬる雪の村消よりもてはつる軒の玉水
庭積雪を　前中納言為相

忍ふれは草をとりとめて雲間にかくれぬ宮城下志六

前大納言為泰

みやまするかたの山のおちはをくれもあらしにたへぬ

前大納言為兼

岩かねの苔ともおもはぬさまにかけとめるは

文保三年後宇多院へたてまつりける百首歌中に

前大納言為世

風さゆるうちの網代木せとはやみこほりも波もよそにかけてそ

前中納言雅孝

山ふかき雲よりたつる炭竈のけふりもみねにたなひくらん

題しらす　安嘉門院四条

小野山やくもゐの下りてそ炭竈のうへにかゝる白雲

住吉の社に奉りける百首歌の中に炭竈を

前大納言為家

とゝみまし炭竈に煙をこめてよそめにすめるかたの峯

遠炭竈といふことを

平貞時朝臣

すゝの海の炭やりとそれとしられて林の雲にしる中の山里

冬くさの心をよませ給ける

院御哥

くもらぬ夜の光ハ宮ゐにて奥ふかくかゝる煙火なりと

日吉社へたてまつりける百首哥の中に

燈火を　皇太后宮大夫俊成

燈火はまたこし春あつらぢてよふかきさまをかくさむ

冬哥の中に　太上天皇

さむしろしたゝのまやとふかき霜夜の中に我をまつらむ

寶治百首哥より冬月

後深草院少将内侍

雲の上のこよひはにはにさえて法の筵の月をみるかな

文保三年後宇多院へめされける百首哥

の中に　民部卿為藤

をとめ子がかざしの袖にさす霜や袖よりさむき

永仁五年五節まゐりのついでに行

けり　亀山院御哥

面影もみし心はむかしにかはらねどめぐる袖の白雪

なへし　伏見院御哥

をとめ子が袖の白雪たちまひてふりにし世をもおもひ出けり

文保百首哥の中に

権中納言公雄

さよふけてまがふ霜夜の衣ぐさにたちまさりけり

賀茂臨時祭の舞人にてまゐりける時社頭にて
よみ侍りける　前大納言為成
山あひの袖に月影さしそへて霜ふきさへとかさねける哉
文治六年女御入内の屏風に十二月内侍所御
神楽のところ　皇太后宮大夫俊成
よろつ代やかはらぬ岩との神あそひ雲ゐの庭に鶴のこゑの声
冬歌の中に　永福門院右衛門督
のこりなくとしもや暮行嵐のみ霜をすさまし
正治二年人々に百首歌めされけるついてに
としのくれを　後鳥羽院御歌
春まては雪ふるとしの空なから又霜こそはらふ露
十二月十七日立春節なりけれは人のもとへつかはし
まゐりてあらつき立春の月とて
中務卿宗尊親王
入ぬるの影もやそてさむからん春にかはりはつる年の月
冬庭といふ事を　伏見院御歌
なのつゝ垣ねの草をあさむしや霜の下草もまたちりて
としのくれに梅をよみ侍りける
貫之

一とせにふたゝひ見ぬ桜のはなも春のなこりありあかぬならひ

百首歌の中に

後鳥羽院御製

折ふしの花やもみちの名残まてさしもおもはぬなかめの蔭

花しらす　永福門院

あさみとり日のゆふへの窓のとをみに柳の末も春ちかく

冬ぞとてしらる

卜部兼直

霜おけるかりやまもりのよはにも年の暮をおしま

百首歌奉りし時

関白右大臣

さしてくれぬとおもひし月日のかけとやきえん

藤原為明朝臣

流れゆく冬さへあれとみ河のかけに暮れてやみなん

寛治百首歌の中に歳暮を

正三位知家

くれぬとてなにかいそく年をとゝめて人のまちける

春とみゆる

風雅和歌集巻第九

旅哥

人のむまのはなむけに

貫之

とをく見てもろともおもひやる心をもともに旅ねはせさせなん

あのかた日為義朝臣へゆく母為相むま

のはなむけすとてよめる

久堅の雲もへよられはかむふるさとそ人の立とゆるかな

とをくまかりける時三条太皇太后宮大夫

はりそくとあさりせさりかれはけり

康資王母

旅衣たつにあてそは秋霧のおもかけさへといふに嬉しき

とゝまれともろへまよふ人よ清うつゆくらん

民部卿為定

めにみゝぬ心をくよなくさにやあらてなきはおほえなり

百とせの中に曉を

安嘉門院四条

いつくにか在明の月はさそふ人まにならぬる旅の心を

題しらす

順徳院御哥

旅衣あさたつ人はたゆむとも雲にくれなゐ明ぬる夜の空

修理大夫顕季

あさちふの野の草むらかれハ狩人の袖そ露けき

藤原定宗朝臣

杉坂乃霞ハわきもねと出て立ハ杉みちにし枝の下陰

藤原頼成

物さひし霞乃中に生ぬれハ北山かけて竹の上

藤原朝綱

ふもとのねと山とりも人によそへりてうちまかせたる足引の関

藤原敦定

秋のゝと散ふくらゆふみ山路よきて見る人乃聲そ寄ける

山路樹といふことを

道命法師

岩さみのかりよしらぬ峯つゝき雲にまよひてさける樹

院に三十首奉りめされし時山路

權律師慈成

行末ハいかにとも白雲のかゝる巌よ又むかふかな

夕猿行を

院御製

雲霧よ分入谷ハ山ふかく夕日ほのめく峯の樹

修行し侍りける小法師連れて侍ける橋信念

良宗かりといへる侍りけり

前大僧正道昭

まけきつゝ山したやましぬれとふく嵐のうちに奥の秋さそ

延政門院大納言

山たかみ峯をわたりてこゑあはれましらなくなる岩ねをそゆく

五十首哥よみ侍けるに猿

前大納言為兼

めにかけて入ぬる山の松の夕日かけこそましらなくなれ

寛治二年百首哥め侍けるに猿を

従三位行能

一村の雲かゝるよりあらしふく猿のさけひもとをこゝろにそきく

題しらす

和氣仲成朝臣

ゆふ暮て宿とふ人もなき山の里はましらのこゑそきこゆる

平如法師

夕まくれ霧の海にふる山猿はこゑのみしてや宿とふさと人出る月

猿月をよみ侍ける

従二位為子

あはれなるやまのゆふさと夕山の尾上の月はさひしかりけり

平維貞朝臣

猿さけふ声の枕の露ましる里なるやとの月影

九月十三夜いほりへまかりてよみ侍る

乃ことゝいふ所にて海邊月といふことを
よめる　　　藤原正重朝臣
ねて秋の月をひとりそながめつる磯よ波枕して
思ひしらす　　従二位基輔
秋の千す浦わりの月を枕にてうちもねかぬ波の音かな
藤原頼氏
とまり舟人のよる磯の波の音にこそひも夢はみてまし
藤原正重朝臣
秋をこめて猿のさけひもあはれ人ハしほまの月とながめしかな
羇中嵐と　　　前参議俊書
吹おろすみねの高ねの嵐に袖もそほちてさ鳴の音
あつまへまかりけるにやまと川といふ所にて
よめる　　　前大納言為兼
やまと川といひそかれにかはれ人のまきせのとおき世のよ
さやの中山にて
嵐の雲は八重の波をめふけく嵐とわたるさやの中山
猿の声とて　　光明峯寺入道前摂政左大臣
行の葉もさやの中山なきをとりねの夜ハ猿のなくなる
あつまへまかりけるにみちにてよめる
前大納言為兼

あふ坂山杉の下かけゆきをふく夕嵐ふきてきえへりかな

懐旧友といふことを

聖尊法親王

わすれてもあるへきみちかと撰者と申けるのちよりの懐人

前太政大臣家に三千首よませ侍けるに述

懐といふことを

前大納言為泰

天原八十路ふけて照月のみちさくるためにのみ舟そくも

雑歌の中に

前大宰大貳俊兼

あはれ身のまよひてきぬのへたつ舟にちかきちかき

世中さかしく侍けるにみくさの山城とを

つもりておもふこそありかたふとこそふりまて

前大納言為氏

うきよふしのみ岩の道あけて侍しにもあらぬ我かひかれ

もとめかぬるにまよひ侍けるにつけて々に力よし

あはれことを懐人のよそにも家によみをくりまて

てよみ侍ける

永福門院内侍

うき山しけみのふもとにもおもふや数へしらぬかちらぬ懐人

前大納言為兼安藝国に侍ける所へまかりて

まかりて思ひとさそひて云よみおくりに海山

とふへと我

道全法師

うき山の花ひやゝ道ちるけさはこゆる人やまれの袖まで絶か

さぬきより都へのぼるとてみちより崇徳院に

あてまつりける　寂然法師

なくさめにみつゝもゆかん君すまむそなたの山を雲なへだてそ

松山へおはしましてのち都なる人のもとにつかは

させ給ける　崇徳院御哥

思ひやれ都はるかにおきつ波立へだてたる心ぼそさを

雑の御歌の中に　後鳥羽院御哥

よしさつるあひの衣を殺くよいそ都の人よかくらん

祭主定忠

ほかにこゝろの西影をふかくとむるあひのみちかな

権大納言公蔭

清めよ梅嵐よ袖をかさねて聖山の猿も日数へよりけり

後伏見院御哥

いふ鳥のなきあけのまもみえねまて都の空をとひそかね

寛治百首哥の中に猿を

兵部卿隆親

あけさる霧の枝はひかりなきおなし里まての程への谷

猿哥の中に

正三位隆家

ゆきさむき夜の霧よりつゝき萩も猿の声かなしと人やきくらん

題しらす　人麿

いさやこら倭へはやく志らすけのまのゝ榛原手折てゆかん

笠金村

志ほつ山うちこえゆけは我のれる駒そつまつく家こふらしも

読人しらす

里はなれ遠からなくに草枕旅とし思へはなをこひまさり

敦頼あつまのかたへまかりけるに人々餞し侍けるに

従三位頼政

あかすとも行をとゝめむ老の身は又逢ことをいつとしらねは

題不知

道因法師

あつましも人の往ともあへぬ別にや色こそかはれ

贈左大臣範季みちの国のかみにてくたり侍けるにつかはしける

従三位頼政

かへりまてえそまつましき君か行末なかき我身ならねは

崇徳院松山におはしましけるにまいりて日数へて都へかへりなんとしけるあかつき

よめる

寂然法師

かへるとも後はまたとたのむへきこの身ならてはなきそかなしき

行しへまかりけるみちよりしやこへいひつかはしける

なしけり

登蓮法師

哀とふ深山のなかにせは何とか猿の声はきゝます

民部卿為定

なれてふ心のみちはおとにこそ谷の嵐の白雲
秋の山おろしに成りひゝきと鳴けり時

藤原有能朝臣

山姫の紅葉の錦秋よりも世なれて人のよそにそ見ゆる

寛治百首奉りし猿宿

前大納言為家

哀とも聞ともなれぬ夜な〳〵も猿はなとかしかましからん

山階入道前左大臣

霧ふかき谷の岩ねの枕にもそめかねしいくよ経ぬらん

従二位行能

岩代の谷やま山ねを谷茂も猿はよるなきわかるさよきこゆなり

猿の声の中に

前大納言為兼

なれてよ聞し人をはえせは叫の猿をものひやるらん
結ひ捨て我かくしてる猿枕かりねの夜半の友となるらん

読人しらす

西まるのさはまへ深山まれ中に霧の小猿はしらすな
なかれこみの夜を

風雅和歌集巻第十

戀哥一

戀哥の中に　　権大納言公蔭

契ありてかゝる思ひやはかなきとみねとも人のやそ恋しさ

百首哥奉りし時恋哥　　関白右大臣

しのひあまる袖の涙川下にはやさき水のこゝろを

題しらす　　前参議教長

しりそ袖のもほしめ涙川あさつねといふせなし

後醍醐院御哥

我恋ハまたりとゆひのこ葉のしらぬ色にみてはゆく

初恋のこゝろをよめる　　前中納言定家

はかなきふ雲井にそてにあらむとそみりせぬ人のおもひやるらん

恋思をいふるを　　今上御哥

猶さても我なれたしたゝみのはなやしつゝは縁うちなる

院六首哥合ニ寄恋　　冷泉

人をまねくゝもちれ思ひはいつはなつみ日もかなともにね

遠山を　　権大納言忠良

岩にのみくるしく山はかゝれとも心の秋はよそとなる

題しらす　　従三位親子

梅かねの松の下枝よしの山桜をはみてはこそ

たしめそくのりにつらしけり

大貳三位

うつりかの風下草いふてきよまこれもと人はしらせん

延長五年内裏の御屏風に女ありたるところ

かりのいふまへは梅花まて

貫之

よそにゆくいものなかりとみえなから心のうちにしのひあへめと

遠所中に　　従二位家隆

青柳のうちさし山はそちならて見にかゝるとけぬ日かな

寄樹恋といふことを　　前大納言為兼

初河面にいそあてもいふかれ枝の下葉ちるそつまなれ

とし月ちきりかへしかくしきみけりつ人は

権中納言敦忠

人しれす年にもあらぬ人ても何ともかへりあふ人されと

堀河院百首歌小恋意を

中納言国信

こちらへくるかならぬほす恋せそふあらきさと人よみせとは

おなし心を　　太宰大弐重家

はつかなる時をおもひめかちさめくいまそ心をそへてしやは

恋乃御哥の中に

後二条院御哥

思ひ出よ人との兼をわすれて心よこむろ秋とおもひつ那

恋硯といふ事を

藻壁門院

思ひかく硯よむかふ翠よ人よいふさえひかへは

百首哥奉りし時　　大蔵卿爲義

浅しとかりさにても物おもふ心のいろはかはりましん

恋哥とて　　宣光門院新右衛門督

思ひねのよにわすれぬおもかけはあれはそも名よ出ぬへきさむ

院六百首哥合に恋始を

権大納言公蔭

しらせはや我はもらさしもうちみつ淡まてすむ行こそ

寳治百首哥の中に寄月恋

花山院前内大臣

あふことの面影にあり三か月のまれてあふと志らせてしか

月前恋といふことを

徳大寺右大臣

我袖よおれかすつ月そやとりけるとふ人おもいてらん

禖子内親王

月いとふむかりの涙か心のうちふかしねさひり

寳治百首歌よ寄草恋

前大納言為氏

まゝねてそおもひもとよりや忘草思ふよまけは人を忘れ

建長五年五月後嵯峨院よ三首歌中

てまつりけるに寄郭公恋といふことを

前大納言為家

時鳥いまはさ月となのるなり我しのひねそ時そともなき

題しらす

鴨長明

思寝ハねよそそあそ袖さへしれいつか野の露乃まさきねと

寳治百首歌よ寄関恋を

皇太后宮大夫俊成女

あえて又恋しき人よ松坂の関守いそそれともたのまめ

題不知

今出河前右大臣

恋しなむ後の哀れをあはりかともせめてしらせしか

恋のこゝろを

永福門院

はくしれつゝなつかしいにかけぬはかなさ契のこして

日吉社の哥合に

刑部卿頼輔

ゆくとてもつねにたのまぬはかなさよあすをまつまのなかき世なれは

たしめて人のわりなにつらかりけり

大江嘉言

思ふ事ともなく秋はあはれなりけは色に出ける物をこそ思へ

はしら波

藤原元真

忘るやとはなしりやは思ふらんたのまきは深くなりにけり

はるかなくのを続けゝ人のりとへつらりきつ

俊頼朝臣

よしいつはかみのめくみに世よ恋しなん後の世まてもあなさあません

恋の哥の中に

進子内親王

月をみるくるしみやも我つゝまれ人はことゝは人のはらから

百首哥奉りし時　大納言為重

なかめつゝ我のひねよみる夢や人はゆるさぬ契なるらん

恋哥とて

源定忠朝臣母

忘られんのとはせめて歎かやせれも逢見し後そ恋しき

文保三年後宇多院に奉りける百首哥の中に

後醍醐院少将内侍

つましたる人の出家するハ落飾まてこそゆかさらめまいれ
法まてなりけりと女の許よりいひおこせけれハ返
小かんしくれハやまつりけり

前右兵衛督惟方

法まてしたるハつとに落飾させられさりし家をそうちまた
忠守のよ

權大納言公宗

出家せよといつまてあさましきをみるさきまつりしる人に被遣之

順徳院御製

いひあはりしまんとおもふとのかも我人の中そありさ

清輔朝臣むすめのもとへ遣しける

西宮前左大臣

露ふかきなのむかしハみなけまた雅よりもわか我なかなかに
女のりくにそしめてつかはしける

祭主輔親

いふと見しめかにさよもしらぬとおもふらんはこそへよまう
女よ遣しそし侍る

東三條入道摂政太政大臣

まきのとのさゝけハひさしあくるとかたらんと思ふ人は

返し

前右近大将道綱母

かたらん人のさき室にあくるひなかるへき契なかりそ

那慈乃心を　源兼氏朝臣

くれ竹のよゝにちとせをあさみゝのこゝろそうき

春乃ころ山科まてりとほつまきけるに桜の
花さかりなる宿みし侍れはあるしもとも
せ侍らさりしかはなくいひけるをいひ置
侍りける　藤原隆信朝臣

桜はちるをゝしみの春風乃ゆゝしとをもふとや吹らむ

返し　よみ人しらす

ちるを見てさそひぬるは桜はなさそれてこゝろもとめ
あはれにいひくわいめん人にとし侍けるに

いひつかはしける　藤原隆信朝臣

ちふるをもそらにまよふみ山の里は桜のにほひけり

返し　よみ人しらす

分ほらぬの花におさまれはいつさよ深みの花とこそみれ

恋歌とて　永福門院

あやしくもわかそみそれはゆく月にかさしてしよ

恋のこゝろを　西園寺前内大臣女

ぬれしてそ恋し人まてゆつりつらうてめくるも袖乃露かな

六帖題にてひとりねといふことを　徽安門院

大かたに逢日もまたと我からやなけくをしひてけつゝそ

恋歌の中に　永福門院

しのふるにたへし人のまゝの一ことよさそといふもまたなかりけり

恋の心を　後伏見院御製

あらましや人の契りを頼みてしか我思ひをはなさけにゆつ

六首歌合に恋始といふことを

院御製

うちつけに数ならぬとも数ならぬ契りてはいかゝやと思へし

徽安門院

しのふとはかくこそおもへしれまさしなけりし人の数の

百首歌奉りし時　藤原為忠朝臣

あひ見んともまては我身とら契なは人もしらてそ忍ひなん

恋歌の中に　新宰相

いふなそとは我心よりこそ人やその末の憂なりとかはりは

前大納言実明女

ゆくすゑもしられぬ今は又頼し憂なきまことこそ思ひ捨る

権大納言俊定

身にしはつらしといひし我のつらさ思ひあはするもこそ理

不惜名恋　平宗宣朝臣

なきなとも今はいはしそれとたゝつらき中世の思出にて

題しらす　　永福門院右衛門督

暮かゝる松の嵐の鐘のねに又さそはるゝ来る色もなし

初冬遠山の心を　　進子内親王

けさよりはやゝしくるらし遠山の峰の色こくみえつゝ

題しらす　　永福門院

とふ人はかれぬる比のよもきふにそれとはさらに松虫のこゑ

恋歌の中に　　太上天皇

我はたゝ人まちてそいつまてかこれと云の世の契なりしや

進子内親王

袖まては暮まては見し面影の心よそにて暮るなりけり

百首歌奉りし時　　徽安門院一条

さすかにはやれとの人のためにやとをしのひつゝ人の恋をせんとて

恋歌に　　永福門院右衛門督

ことかたのひとをはいはぬをやたへぬ中そ思ふかな

藤原為秀朝臣

おもふさまにみちのくれしかる恋さらはかくこそならめ

女のもとへつかはしける　　俊頼朝臣

恋されはおさへてよそにつきもせぬ人は

恋歌の中に　　賀茂保憲女

思ひしと心をとりしむかしを中にひまさりて恋しかるらん

題しらす　よみ人不知

空蝉のうへめをよみけるを聞て身のうへはいはけなきことを

わすれはてゝよへと空蝉の人めをよそにいかにおもふを

人とをもよそにいかにかけて心のうちはよそにさへ

中納言家持

うつゝにはさもいはすして夜のまに夢にもみえよ我恋ぬらん

よみ人しらす

いかならん日の時にかもこの世のことはしらねはなそ我恋ん

くはりこゝろもしらて其のまゝいかにもそほつかなき

風雅和歌集巻第十一

恋哥二

忍待恋の心を　永福門院

頼む中に重てこぬ契をそ待りのちにたのまれ

恋の歌の中に

猶しとてこそやはならぬらん待我よむかふ夕暮のそら　院冷泉

まちまたしと思ふ心をそ暮の空にいさゝか

従二位親子

あらすともたのめぬ夕暮を我待る夜のそらのあはれさ

藤原重綱

とはすたにつらさをせめてこらへすは待を哀の夕暮の空

待恋を　　新宰相

とへかしなけふのあすもしたのめぬ暮そ空に待つる

恋哥中に　　伏見院新宰相

身のうさをなとたのめぬ暮は待といはんまてとおもふこともなしと

寄鐘恋の心を　　前大納言為氏

より更はまつともおもふ夕暮もとかくやちゝす入相の鐘

恋哥とて　　永福門院

暮かゝりおもしとふ雲の絶まよりこゝろにかゝる山のはの空

待恋　　西園寺前内大臣女

まちつくるこよひもいてゝかたふきぬる月のほかには待そてもなし

百首哥の中に　　前大納言為兼

身のうさをいはてやおもひてみつる人の更なるましかはと思ひけるかな

寄待恋の心を　　前権僧正円伊

よひのまは誰を人めかつれなくもてはやすとかへてそ待

光福寺前内大臣女

待むなかの人めなさけあるやあるとは思ひしもそ頼れぬ

恋哥とて　　永福門院

待のめすてゝこえぬ物もやもことに結ぶ心をは思ひかねつる

契明日恋といふことを

後伏見院御製

去年むなしき空にふけゆく夜半のおとをもしらずさそひやたのまん

恋歌の中に

進子内親王

見ぬほどはしらずさすらへぬるも猶言にわするゝ人のまつさ

後照念院前関白太政大臣

西新ふかぬはふさくちて契し月のかげぞふけゆく

藤原隆方朝臣

下月のあかつきばかり

つれなさをよそへてもまたまちけりつゝふけぬる夜はまだにまい

ふしやて待まつ涙とめてもしらても

またぬ月とながめしかど月みぬ君かたに

そむけれどやつれしけしきいかへし

[illegible]皇太后宮下野

契りおく人まつ宵のわかれしめ月ならでみしもわすれぬそをしれ

寛治百首歌の中に寄月恋

藤原隆祐朝臣

待まにやまくらの板戸のやどりさし月もそ出まさへいつはら

おなじ心を

源和氏

三重とは契りし人のつれなさも月みるよひは猶忘なん

権大納言公宗

あけぬとも誰かはいはん人まつ夜の月のみひかるこゝろ新

忍待恋のこゝろを

永福門院

槙の戸を風のならすもあちきなし人しれぬよのやゝ更る程

契待恋

従三位親子

人はいさ契し契れとの我ゆゑとはやまちて更ぬらん

恋の哥よませ給ける中に

伏見院御哥

[illegible]とりてみるそらもおそろしひそかなれたのむまじきは人まつならて

暦来待恋といふこゝろを

永福門院

我も人も哀つれなきよなよなにたのめもやまし待もよはらす

宣光門院新右衛門督

更ぬとはかりのねさめのねこゝろにひとつ衾のちかひに待もよはらす

夜恋を

院御製

暁をまつとよされてもむかふ夜の涯のかゝりし夕けけ

恋の哥の中に

土御門院内侍

いまはとや山のあらしに立まてそなたに心しぬ我恋しき

待恋の心を

伏見院新宰相

文はそねむ人の道をさへこそやさしかりけれたゞことの音信かなき

二品法親王尊胤

恨みてもあはれ契をあはれまだ忘れすまねく方はさりともなし

進子内親王家宣旨

さのみやは我ゆへぞいつまでかけはことにひとへに猶とし迄（まて）

従二位為子

ゆふつまはうきは猶あり涙のみさめよ黄昏ていくよを

契恋を

前大納言経顕

さのみやはたのみやせまし猶の契をもさすがに限ありやと

恋哥の中に

権大納言資明

偽のある世と誰もしりながら契しまゝをたのむはかなさ

忍契恋

左近大将道教

あまりは人めのひまを猶えても忘ぬ契りやならん

百首哥たてまつりし時恋哥

権大納言公宗母

つれなけりつ程をも人のみならず猶我身の度ありかなしき

進子内親王

いまやは見えしいつやと人にあふこそ又たのまぬ契りは

恋御哥の中に

伏見院御哥

こよひすぎよりもやてそゆくへこそひとりはさてあらまし

待空恋といふ事を

永福門院

たのまれぬよひのあらましなれなれてまたぬにまつははかなさのほとしらす

同院関侍

この暮もまたれし志て涙よりそふかたちかつ我とふ人

恋雨を

きえぬるかたをまよひしあまよはさゆふくれにしたひかへしまちて

恋身中に

従三位親子

我とこのさかりを志めそらにみねはあさからてまことりとつくそあれ

院に三十首歌めされし時恋月

前大宰大弐俊兼

あめのよはこぬとしりつゝまてとこそ有明の月よと独みるとや

契不来恋といふことを

右近中将資盛

中くふたのちきりせしはゝの夜の人をまちしかたみとしられはや

伏見院の御時六帖題にて人々に哥よませられけるに一夜へたてたる恋といふことを

前大納言為兼

秋の夜もそのむつねまちし月のつゝきよりこの夜の影もみやたえん

二夜へたてたる恋

従二位為子

むかしにて人めかるよに来ぬ夜をもさのみはあはれとおもふつれなし心を

西園寺前内大臣女

ゆふまくれときくにはまちしものからこそ来ぬ人にまちぬるものとわれ

暁恋歌

賀茂重保

さりともとまちしを結ひ捨て今はとて心よりこそ鳥はなくなれ

恋哥の中に

進子内親王

むすひてしおもひのたよりとやとむすひ置し露のおもかけ

待恋の心を

永福門院

行とおもふ我にいさゝへそまちつれはあらぬ夜のけるよ

恋哥とて

とにかくに人をいふにはあらねともあはれとも人もおもはん

堀河院百首哥に初恋を

修理大夫顕季

まれにくるみてのみそ色にいてぬとおもひきよはねおもふの松原

逢恋

源兼氏朝臣

とにかくにうしさまたけの物をとて今こそなかと結ひしひもん

あふ女はなしめそりのこしゆくとひてうりく鶏はつけゝり

従二位頼政

逢ことも世にしあらはとおもひしに中々に猶かはるなん

八月十五夜月のあかゝりけるに秋まてといひちきりて逢
ありける女のゆく恋ともひ待たれけれはいひ
つかはしける　藤原隆信朝臣

人とは雲ゐの月はよそなから契りしちよのかはらぬはなや
久し　読人しらす

頼めこし月をしるしのうちになら雲かくれにも哀とそ見ん

初逢恋歌　大宰大弐重家

あふことは身をかへてともおもひしにさてしも惜しき命なりけり

忍逢恋といふことを

従二位為子

うき中のそれとは人にわかしのみ夢とみえさとも今は頼まし

女とよのきはまてうちすてられして頼まいひつかはしける

前大納言為家

いまそ世のうきにはくともぬやきん夢はかりなるよにねともなき　卅六

返し　安嘉門院四条

あはれしや夢てふさうしみそてみえし見えこし夢そかなしき

恋歌とてよめる　永福門院内侍

逢みつるこよひの哀夢ならはさめてはつらき思はらなく

従二位為子

恋とそやかゝりもせまし人ことに心をわかぬよその契を

恋中違恋といふことを

藤原為基朝臣

うつゝとはなつくちなひねの恋はさめても嬉しかりけれ

女のもとにおもはさるさまにまかりて捨くかり

なとして後ちかへりてやつかはし侍りける

前大納言為家

ゆくゑまて頼む時は恋わひんとつゝむ心にあまるゆゑさへやけり

返し

安嘉門院四条

玉ぬかつる恋にあかれてみもかくしを思まかれせと

題しらす

法印長舜

わかうちに覚とみつゝたのまれてよそよそ恋は夢はかなくなるまて

女のもとへちかきわたりにあつまりてまつ

待つれはおもひもかけぬ恋にまかせつゝは志るへき

のちにしなりぬりとやて侍けるかりけれ

かりけり

前大納言為家

こよひて御心にみてそこにまかせつつよそに恋にこちなるちれ 志るさま

安嘉門院四条

かへし

身をとこれ契りをは徒よとのぬなかちのちれ志るかな

忍逢恋

徽安門院一条

わすれなむまれの逢瀬を又とはぬ人の心のつらさ絶よ

建治百首歌の中に

後西園寺入道前太政大臣

かさねこし夜半の袖まてかはらぬをいかにかはらん枕

題しらす

読人しらす

逢ことは君にあつまの関なれやとはぬなからも今そあらはる

うきおのれ井のやましたのこゝろを動かくなまじひにもれはやらん

恋歌の中に

章義門院

むかしより恋はしらねどこのくれはまことに日にそふ思なるらん

百首歌奉し時

徽安門院一條

我為はふかき方にいひなせとたのみし夜のことそかなしき

忍逢恋

新室町院御匣

夜なりける人まれ時のまをも又いかならんよそにもらさん

安嘉門院四条

人よりも思ふ心中の嘆をもあはれしらせてたゞあはれなれ

恋歌に

徽安門院

なほたのむ人のいつとの夢までも又いつく月そかはらすもすみけん

別恋の心をよませ給ける

後伏見院御哥

別路はいそく鳥の思よりも涙こそ先たつ月そ嬉しき

わかれし心を　　権大納言公宗

うらむへき人もわかるゝめ鴫の雲さへ聲はあとも見えなん

入道二品親王法守

あけてとふ秋の思ひかゝるとなれと又はつかしき猶そえん

左近中将忠季

はてもまたいつそとおもふ老の身にてむつまし縁よおもき別哉

恋暁といふ事を

永福門院

こゝろさへいとゝ別は秋ふかくて又ねさへひさしき鴫のこと

従三位宣子

鴫とこそ指をりかさね枕さへさためぬ夢の契りは

百首歌の中に　　太上天皇

玉さかに来ても帰る人かうつゝのまゝや夢かねてこそさらぬ別ち

出てにし又立かへりかしまゝに別のあとにちかひもなしなり

進子内親王

恋歌とてよめる　　従二位親子

頼めつる又いつの夜の夢に人のたのめをさそくまてとふ

句のうちにいりしとおほしくよみ侍ける哥の

中に　　前中納言定家

てふむすふ袖にあかぬ山の井のあかさる別れり袖の白玉

恋哥に　　従三位頼政

明ぬとてなかしく人の庭芝乃露ハわつかにかゝれ結まそこそけり

別恋乃心を　　後伏見院御製

みやこ人まちやみけんとおもひにも面影くるゝ暮さの別路

前大納言実明女

我もしる人りや思ふつらされ袖もなみたにさよふけてみる両

恋哥の中に　　前大納言為家

八重思ふかけの人のうへに袖のなかゝのしたもかくやはよにしのひかねん

進子内親王

名残ともいはさらすらふくらの玉章に又この書とかくもなをね

後朝恋を　　永福門院

そのまゝの夜ふかき鐘のうらみにハ又おもかくそ袖にしほるゝ

従二位親子

ひとまつ日数ハ忘れしかなさむとけさ別れゆくなそなき

永福門院内侍

待ちよみし夜ふかき鐘ハうらめしくきみをしも待ちし頃とそ之へ

九月はかりあかつきかへりける人のもとに

和泉式部

人はゆき霧ハ籬に立ちとまりさもなかそらになかめつる哉

題しらす　　よみ人不知

玉ゆらに涙のみかりのをまふのあはれなかたこそつらさなめり
藤原元忠
しられぬはたまてさつまちの月のまたにあはれなかく
もしらずなりなん

風雅和歌集巻第十二

恋歌三

題しらず　後二条院御製

いかにせん世に偽のあるまゝにこりてねよと人のたのまぬ

後宇多院によみてさつりける百首歌の
中に　後光明照院前関白左大臣

よしいまはうき身のはてとてもとよのうらみはよそにおもひあはせよ

契恋の心を　嚴安門院

かきりあるちきりとさらに人もはたのまれなくにほとたへ

百首歌奉りし時　前大納言実明女

なをゆるしふそといふなのふるさ契ハ我のりそ

恋歌の中に　院御製

人よまして人のそこの哀とは我そしりぬれくもおもひと

永福門院

なるまゝの哀はつねにおもひあまりていとふそとはおもへ

従三位親子

かはりゆくとおもひしまし人つれに心の色みえてまさるほと

従二位宣子

恋しみ君よしはしそへわすれぬもひとも思ひしれとも

進子内親王

哀けにはさてみそやかやすくにまさる恋こそ人を思ひね

大納言実明女

またしらぬ人よいかなるしのゝめのわかれしきをそ思ふらん

院別当

さのみは哀なりしを報ましてハ人の心とは

大江高廣

恨ても思ひしれ中々になかなかの色をみえましん

契恋といふことを

従三位為理

かく深りはてなる種の恋しさのわれは契の末をなをたのます

恋五首歌合に恋命

院冷泉

一すちのうき世にも命かれは猶もおしみし君かためこそ

契恋の心を　藤原為名朝臣

なかなかに後の世まてと契りしも人をうらみ我もたのまれ

恋歌の中に　院兵衛督

初より契りしまゝにたのむよりつらきうらみはそふにそありける

院御歌

うきなからさすかに絶ぬ契りをも哀なれはそさてもありける

儀子内親王

思ひます限りそあるらん身そと思ふつらき人をおもひつゝさと

恨恋を　今上御製

恨みさへ我身にとまるそれゆへに哀を我もしらましものを

院冷泉

さのみやも心とゝめてとふにしも恨のかすそそふにそありける

恋歌とて　前大納言為兼

とひかしと契りて後の年月はそのかけもなき人のつれなさ

思ひしはかはるものとはさしよりもやまさるそとまたつれなき

永福門院

なほはかなきもやとたのまし絶もしらぬ身そよなき

寄人恋といふ事を

院御製

ゆふくれそたのむよかれは人の心をまよはぬさへはのおもくもある哉

百首歌中に　　　厳安門院一条

人よゆゑは物おもふよ身をうらみてそあかぬ後まてとしらん哉

入道二品法親王法守

まことにもふかきちかひとのかれをよなら人もこゑしらん身のを

宣光門院新右衛門督

かゝりもよひける秋の衾より我をも人をゆるしらちあへ

思しらす　　　永福門院

さそこよひまたもあはれてゆめのまに人の心をそ忍ひ

うれも契りつゝさこそ契りしゆゝみ衾もやといひたまへ

院五百番歌合に恋暮といふことを

進子内親王

うさにそふ衾よ秋をしらされて一つねもえそ宿ね

恋歌の中に　　　権大納言公宗女

人しれすまたとおもひしころさへ恨の下によわるさ衾を

後京極摂政太政大臣家に百首

歌合し侍けるに契恋を

大蔵卿有家

さきの世とおもふにそ憂かれ契をきふの契りのことは
千そなれ中に　前大納言為家
契しをわすれぬものはつらしともおもはゝなふと命なからさめてさき
百首歌奉し時恋歌
権大納言公蔭
なかしも哀なるらむくらひまてつれも二世の契りとおもへは
恋契を
院一条
うきみしも哀なれそふよ世そこのまよさりける契とおもはゝ
恋情といふ事を
左近中将忠季
おもひとけ心つよさはゝまたそめしなるを人のこゝろなれはたのむか
寄月恋
従一位教良女
月をこそなをおもひ人へやこひらんうきをかけける人のおもひと
契しらす
従二位為子
秋をもひさしくは命かけしとおもひし人のこゝや侍らすら
伏見院新宰相
かさりけるも契りは哀なるいつまて秋月のくもるらん
平根恋といふ事を
徽安門院一条
いまはまたつらしとおもふなやみのなくさめのはふ人のこゝろむ

稀逢恋　　大納言公重

逢ことハいくよそ稀ハ袖ぬれし後ぬかれ見まくほしさを
思しらすや　　殷富門院

うらみしもまてつらさをあはれしなりけるへよ契りを
あはれなる梅しも忍すらふにたけつよ思ひてなれ契と思ハ

百首哥に　　太上天皇

そまてハ思ひ見しやと思ふ人の怨ふるさてハ逢しき

恋哥の中ニ　　儀子内親王

我と人あはれなるかとてなとハつらきなるふ恋しき

根恋の心を　　後光明照院前関白左大臣

ねてもうらみやつらさになる心の程ハいかにおもハしを

山本入道太政大臣女

つれなさを恋ぬる月の程ハあれと忘ぬ人のならひよ

恋哥とて　　権大納言公宗女

逢見しつゆのうつみよおもかれて見をしたくの程とを

恋五首哥合に恋涙を　　殷富門院一条

人のみよ涙にかしてあはれなるよ涙ハ我身の思ひになれとそ

院一条

忍ふるもとまるしつかなとよね涙なりつゝ哥枕を

恋歌の中に　権中納言公雄

面影はありしにもあらぬうつゝにて又こそ夢のむかしともなれ

藤原懐世朝臣

なをつらき夢路はかりの逢坂をとふらんとたのむはかなさ

従二位為子

忘れはと心よりゆるさて夢にさへみるをとたに人のいとひはてゝ

前太宰大弐俊兼

忘らるゝさへ世のならひとおもふにも人につらくて猶そ恋しき

百首歌の中に　太上天皇

世の契りいかにむすひし思ひより初て今は人のうさ

題しらす　永福門院

たゝはたのむへくもなき人のつらさにもなをおもひよるおもひ哉

院兵衛督

それはやさは月にも人をいとはれんふりはきこゆるのこゝろそ妻

伏見院御歌

うつり行世の気色をふかくしみ人よりさきにあはれしるや

恋涙といふことを　嚴安門院

おもひわふ袖にこほれぬ涙の枕うゑの寝覚なれゆね

永福門院右衛門督

そのゆゑにけふは波こそまされつらき恋しけれともおもひはかる

院百首歌合に寄心恋を

具氏卿

おもひねによるすゝしもいかなれや夜はなみて波のよるよる

恋しらず

今出川入道前右大臣

身をはそらさみをもまつ我波のをもみわりあかねそかけ

前参議家親

つれなくともおもひしつゝねよ寝するほとなみと波のうへのをしん

藤原忠重朝臣母

うきとのをもおもひわすれてものおもふ身によそかさめのしくれたるそ

恋歌の中に　伏見院御歌

波のうへにうかぶ我にはかりまにしもまれてこゝろはまたれなにまよ

思ひつゝ物をまてしなおもひをはかなくも人の身をさむすれ

従二位為子

世をてもおもふはかなれとそたにおもふ心ふひ人をみ

百首歌奉りし時に　厳安門院小宰相

まことせの中をさてあなに中にあるみちのうらひを海なふ

文保三年後宇多院へめされける百首歌

なり　二品法親王覚助

人心おもひきるにかなへいのちとにもとせむくれて

六帖題にてよみける中にあやを

前左兵衛督為成

夕暮はおもひみだれて雲の色のあやにあやなき人のなさけを

題しらず　貫之

秋は袖そめつゝふかき恋しさや涙の川の色にいづらん

読人しらず

うちわすれて恨みおもひそ天雲のよそにもふかくおもふなるに

恋歌の中に

大納言実家

恋すれば天のみそらにみちぬるは涙の色はふかくそみけれ

院に三十首歌めされし時恋月を

権大納言公蔭

天雲の絶まもまつと待月のみちくるさきは袂なりけり

百首歌奉りし時

正二位隆教

そのまゝにおもひあはすかくこそなきさはにほひよりあはれはかな

夏

後京極摂政太政大臣家に侍りける時家に六百番の歌合し侍りけるに寄風恋を

前中納言定家

しらざりし秋をはかぜのをとゝもせまして枕にしられ袖のこなたへ

恋はとふ人もなきを

権大納言公蔭

君故に忍ふおもひは大かたみれ波とは袖によるよるまさりけし

伏見院御哥

いせの海清き渚にひろふ事もかひあるまての玉とこそ見

恋哥あまたよませ給けるに

恋しさになりもてゆくなかめには面影すらぬ草も書置

寄書恋

権大納言公宗女

何となくちらもとられぬ玉章よ我かみかさふいかなる

儀子内親王

忘れしとちきりし玉章に残るとも忘れはすむとのみ

宣光門院新右衛門督

なをさりに人はみるらん玉章に忍ふ心のかくそのこさん

通書恋といふことを

法印実性

かよふそいかなのまん後よ来るをもとゝかぬ夢の跡

人のふみをわさとしもちすとさてう

らん絶えれたし　よそ人しらす

それは山霧りさぬとの名も色なるゝ深山はいかならん

返し

相模

なくぬとれはなりせはとのよそ風につまてもちるさまや

実方朝臣みちのくにゝくたり侍りける人のもとへくしを
つかはして恋しくはこれをさしてこそさせと
申侍りけるをある人にまかりて

三条院女蔵人左近

これやさはおもひし風のまよひそといひおもひあさくとをさらめ

宝治百首歌に寄玉恋

花山院前内大臣

今さらにわすれしは白玉とちりて袂よりぬくなみたそふ

冷泉前太政大臣

白玉か何そとたとる人もあらは涙の露といひてこたへん

風雅和歌集巻第十三

恋歌四

日ころあひみる人のもとにつかはしける

権中納言定頼

逢ことをあかぬすさひは人そ恋しかるらめ

あひける日女のもとよりかへりて後遣
はしける

左近大将朝光

後朝はこゝろやまさるあひみぬよのこそ我は恋しき

返し

馬内侍

いとしくもあはぬよのまはなかけれはあふ事よりもなにかならん

題しらす　貫之

ひとりねしとつくよ草枕旅はいとゝそ恋しかれ
人のこゑとよのめて見えぬゝしさりけつと
めてよめる　和泉式部

あ鶴のなくさむ世は秋の空と心やりてもあまりて物

題しらす　よみ人しらす

いかに袖まくらはりより我身の夜のおきつゝ恋しきをあつさ
いかにして恋を忍ひてまことに恋はまよひとも恋は忍ひかたく
大原やをりは里の妹とこそ思ひその舟の夜に見つゝ
まつりこの夜はのしらすゝむる宿の風なるもみちのおつらかなん

小町

世中は飛鳥川にもならはなれ君と我とか中したえすは

恋のこゝろを　永福門院

忘ふかりし人やあはと思ふ我もつらきより人の恋しき

恋命　進子内親王

忘れしも草木とみるもさこそ身に命にかくる物とおもへ

寄雲恋を　前大納言為兼

物思ふの色まそめにかくめにみゆる雲も人や恋しき

院御製

恋わするなかめと人はしりもせし我とそめなす雲の夕暮

永福門院

今しもあれ人のなかめもしらしと消るもをしき雲の一村
恋のゆふへの中に　伏見院御哥

それとは思ひしらて恋さればむかしの驚ぞ
同院新宰相

ねまちのはさてもくと猶をしふみはよかるとりの音
太上天皇

待も見る月日の猶とおちこちに絶なんとてもたのもし　こと
従一位教良女

うやはとおもひこさはとなほしたりとて今はかれてぞ　おもふ

今はとてつらき恋てみる人のそてはいふふともつれそ　え
前大宰大弐俊兼

恋しさも人のつらさもしらてし昔にかへる我身ともかな
従二位為子

日増恋と云ことを　院御哥

ことそふかくうらみてはみぬ人をあやにくに恋しらす
権大納言公蔭

恨あらはさらにいひしとおもひしかおもひせしてそこなかな
伏見院御哥

いとふそたのみになくなからなかまくは思ひさためよ

後伏見院御哥

たてふくこの道をむかしつきていとまある人と我よの中そなき

二品法親王寛尊

さためなき人の心はいろかはれと一すちにこれはかりゆくらん

院述五首哥合に述懐を

儀子内親王

たえぬこの道のひかりやいつかたん表はかくれなくたのみしとそ

百首哥奉りし時述懐

権大納言公蔭

思ひとれはさすか数ならぬ我身をもつたへ道の恨をもはれぬやみ

述懐とてよませ給ける

院御哥

つたはる道は独なりめて大かたの人よりへそうちこそ歎け

太上天皇

いにしへの跡をはねらうきれ庭ふかくあまりなきをとよのみそ

永福門院

大かたの世はやすけく過人もらし秋月そよく心にはたち道

五十番哥合に御述懐を

院御哥

そことなき恨そつたふる道にゆゆへいかにそ人のおもひすなる時

永福門院

くるとみる人の心にたゆたふらしと見れはそのよもなき

恋歌の中に　　儀子内親王

これやさはうかりける世のうへにしもみえぬ物ゆゑ思ひそめしか

五首歌合に恋夏又恋といふことを

院御歌

かはりゆくさへて昨のそれならぬよるさ哀はかはりゆく

御変恋

式部卿恒明親王

とゝめ来とこひしとおもふ程もなくやまさるゝ人さゝ初なかりせん

昭訓門院権大納言

葛かハとたのむよかの涙よりむなしくおくらるゝそなき

変恋の心を

覚誉法親王

くりかへし思ひと思ふその人の契けれはなきをかやかはるらん

永福門院内侍

かはる人のよそとめてしれはけるまさきに思ひきはまそ経

前大納言実明女

うさまても哀とおもふほともなほ心の色ハかはるを

五十番歌合に寄人恋

永福門院右衛門督

一すちにうきにとりても頼まるゝ契りし程ハ人のことのハ

五首歌合に恋昨今といふことを

儀子内親王

うらみし人よけふよりのちはつれなさのふかきみしらるゝものゝつらさは

恋歌とて

後伏見院中納言典侍

恨みん今はよしやとおもふより心のうちそ又あはれなる

宣光門院新右衛門督

人つらく我のこゝろのあさき哀をて待ぬの契りはなをそてそほしき

藤原実凞朝臣

せめてわか思ふ程にかへてこそうけやつるの情ならは

藤原俊冬

いかにせんつらきのほかのつらさかな又一つ恨はそふ心に 比

恨恋の心を

権大納言公宗母

恨しとも猶世のつねの恨にはいつくのこの心よりそ

恋歌とて

進子内親王

つらしとも中々今はいはしとも猶つらしといひてそ忘れん せイ

儀子内親王

思ひうくるこのまゝのれつらさそて又は哀になりてしつもかな

前太宰大貳俊兼

あはれやはあけぬ一つと思ひそて絶ぬる果はさこそとも忘るゝ物

院五首歌合に恋互恨を

冷泉

あはれみし人やはかなくなりしやまなき秋はからすなりよの末にして

恋余波といふことをよませ給ける

院御哥

人うらみ秋さへ人にあきてこそ忘にはあらぬ身のつれもなき

康永二年哥合に恋後を

人しれす秋のよなかさ寂ぬるの一ふしそかはりとしらす

永福門院右衛門督

あきのよはなかきをしらて世にふるもうらうら人はいひつる

恋命

嚴安門院

うらなさはいひしおもひし世をたのむとて命ひとつを定てあす

伏見院五十番哥合に恋の夕を

延政門院新大納言

いかにせん雲のけしき風のまへと結ほれ恋にこかれくると

七月七日よみ侍ける

西園寺前太政大臣

七夕のちきりもさらにいかよりとまちける秋そ絶ぬ

恋哥の中に

貫之

まれにあふといふ七夕も天の河わたりてぬるしかはとこそしらふ

寄七夕恋といふことを

後伏見院御哥
更にまた忘しとのみ契りける星合の空にあはれそへて
題しらす　永福門院
これなみの心に摘とふなくに萩の花さく妹をこひつゝ
人にまかせけり
光孝天皇御哥
秋霧ハ萩乃野らせ小たつ露乃あまたとも無かりせハ
無哥の中小　貫之
萩乃葉の色にハ妹を浪よわすれし鞍へてたつめ
よみ人不知

萩宿乃秋の萩にく夕けに今そみしらるすゝと
鎌倉右大臣
君まさぬ宿はあれはは秋風になひくおきちの露そこほるゝ
おりふしと結けつゝ月かそへて
和泉式部
物思ふよ哀なりけれ秋かせの人はこよひの月をこふらんや
月乃夜久我内大臣よりたつねつかはしけり
小侍従
なかむらんおなし月とハ思へともすみける宿に心かよりせハ
返し
久我内大臣

こよひまれに見ましや月をそのかみの空にたつねハ

左御哥乃中り

伏見院御哥

世々今よひの月といふにかはるやこよもかはらぬ色はなき

同院新宰相

清見しその世の月といへるもむかしハ人のうさに似り

権大納言公蔭

あはれいにしへのかはらさりける月ハ今よりの影を

前大納言為兼家にて哥よみ侍けり

寄月恋

前中納言為相

見るからに恋しさとのミうつりきて人をはうらみぬ月もうらめし

おなしこゝろを

藤原隆清朝臣

うらみねも中々済しきやとに見るよの月ハわすれかね

暁月思といふことを

大僧正行尊

思出るや君ハなからん行わかれし有明の月をみるとも

左哥乃中に

中院前太政大臣

うき秋と思ても猶わすれさハ面影さらにありあけの月

千五百番哥合り

後京極摂政前太政大臣

秋ことになかめなれにし山のはにかはらぬ影の有明の月

題しらす　よみ人しらす

思ふこと思ふ今宵はわかれは秋風吹て月そさやけき

いつもきく思ひの秋のまゝねよ暁のねさめにも鳴そ聞ゆる

伏見院御製

入月は雲にひかれは空さえて鳴つゝゆくはいとゝはや（き）

永福門院内侍

象潟やあまのとまやのふみそめて稀ねよの床は面影にして

順徳院御製

言はんと思ふはかりの心まてもおとろへぬ涙なるらん

前中納言定家

いとへとも猶にかはらんつれなくて心とさそふ秋よの

院兵衛督

人はうつるとなきものを影はかなくてさむこともやと

恋情といふ事を

[illegible]定宗朝臣

秋なからねさめにかはる心かなこれやいはんとおもへは恋しさ

藤原親行朝臣

うきなからなを心からわすれ出る人の情のとははうれしな

恋哥に

従二位為子

我心からみはむなしさて恋そそよ哀なれはおもひしらさと

左近中将忠季

かくしもおもひやよわりにつらき嬉しさくるも侘り

恋命と　前大納言実明女

かはらぬ人の料も猶ゆるかにそ君は命をたえてきかぬ

哉しらす　伏見院御歌

うきことゝいそおもへてはおもひなさん嬉しくとてもいて頼のよそ

儀子内親王

うきもよふむくひぬらんとおもへは九月ぬ世をはかなく過まし こそ

伏見院新宰相

人ならは月をそらまれと思ひ出すもそれもそれを擬の形見通と

逢不会恋　民部卿為定

おなし世によそに我見るさとへとそつきふにつへつ心なからん

恋歌の中に　親子内親王

うらみてもやとおもふ物しくは我なそへくを頼なのまれ

根恋の心を　権大納言公蔭

忘らさるおもふかりいなそていさねらことりもうらへのまきよさ

百首歌奉し時　左兵衛督直義

我さへうくかく過をうしとおもふはいとさまのはいにまへ人の何らみならん

恋乃歌よ　院兵衛督

たのみこしかはかりまちいてゝそこの恨をと

寶治百首に寄出恋

前大納言為家

後の世はとおもふもかなし行めくりいとゝまちかくなりゆかはちかきかたみの

六帖題によしとも人をわりふとも哉

厳安門院

人をひとのおもふさりとみるほとそこなりてまよひなかはり労をきるかな

題しらす

永福門院

ちきりても人にあはれともいひとこそなけれともつれなさとはなりぬそと

寄情恋といふことを

権大納言公宗

恨みつゝ人に頼をせくらしみねとうきかなしきもねくやしきやかな

藤原宗秀

なをさりにいひしことはそ頼まるゝそのこゝろのわすれぬそすら

恨恋の心をよめる

前大納言為氏

うき中にも恋の数はつきせぬ情といふ一夜ともなし

題しらす

永福門院

いまやとていひしともいてそ思ひそのはかなさよ

つらかりしその一ことはかはりきしなしと思ひなきけりそみ

建長三年吹田にて十首歌講せられける
に　後嵯峨院御歌

うゑおきし我心ともおもすまてしけりてハかはるこゝ
ろやとしもえいかなる人に

道徳公

ゆくすゑに君にゆかりてうれしきハかのみ命の
なかれゐるまとまり

風雅和歌集巻第十四

戀歌五

百首乃歌に　太上天皇

忘れしとたのめしまゝに人とはゝあとあさのこれとしまてはとへ

忘歌の中に　厳安門院

ゆきひとは契しへてつらきをも人はなかの世かれなくよ

永福門院内侍

立かへりこれも夜なりてそのえのしまはしまの物や思はん

内大臣室

なかつらき世ゐかりやと猶猶よるひしもれとまちをはれ

高階師直

なか〳〵に逢見しやとはるゝにのみはかなさも身をたのむかな

後宇多院にたてまつりける百首歌の中に

前中納言雅孝

あひ見てもあらんとたのむ命さへ恋によわる身はあるとも志らて

恋歌とて

清輔朝臣

中〳〵に思ひ後なんと思ふこそ恋しきよりもかなしかりけれ

殷富門院大輔

志ぬやと思ふさへそ頼まれける人のつらさはこの世ならねは

大納言実家

人心うれしかるへき命こそつらきなかりもつれなかりけれ

題しらす　よみ人不知

玉のをのたえすはかりそなからへて人のつらさをみる時も恋しさ

あまりつゝ恋ふる時なくこそ重きはかなにかひ小夜中とも

逢見ても心を我ものにしないはせよ恋するゝにはかりける

小弁かりとにはりかりけるはあはれ

とはれいとかはりて伴りけり

藤原道信朝臣

露よりも小心となるにや荻の下葉のよそにしらせん

従三位頼政

ひとしくもよけ

かたらひ侍ける人にわすられて後逢侍てやつ
かはしける　よみ人しらず
たのむらしもなくて移りしこゝろ少しさてもと思はさらん
返し　従三位頼政
人をみなむかしにかへる世の中に我のみかはらぬ心ちこそすれ
恋哥の中に　二條院御哥
いそ里人とわすれんと思ふ人こそかはりけれ
法性寺関白に捨られける人のもとにて身の
うへのことなといひけるに関白なくなりて後
又従一位兼教といひよられ侍りけれ

身のたくひともなくて萩の枝につけてつかはし
ける　従二位為子
頼めこそ秋の枝にやけし萩にも萩に返し人を
思しらす　永福門院
はかなくて恨とやめてみる中にかはりきつましく我こそあれ
かく人をも捨はてぬは世さへあれ心のうちも雑かりけん
権大納言公宗母（女イ）
跡のみはんともれ思はぬ人にのみかりても
西園寺前内大臣女
うとくのみ我はへこそ月みては雑夜とかくこそ思へ

恋命と　伏見院御製

いふもうしちかりやさひるさんつまよみしとれ命と

前中納言重資

なからへん命をされはいつまてとあはれや我もいのる人もいとふを

百首歌奉りしに　権大納言公宗母

人とはそつれなかれとこふなからんさてふすこさある命かなさと

恋歌とて　権大納言資名

三とせ我身も人とあはぬ世よかろ面影のたれしらるらん

祝子内親王

家さへ人よりも衰ゆるよ身の契りの名残をもなく

百首歌奉りし時　権大納言公宗母

うれしさを思ひあけつおもりやはこそ人のみえしぬらん

みえぬ身は恋侘も忍ひとおもひつつそうそそいふさ

藤原為秀朝臣

恨恋の心を　従二位為子

さひしさは我身をさらに北理をもはまりかへの文三あり

伏見院御製

思ひつつねさめをうけきうとさふ彼よ文恋のうさそしれをあはき

あはれのすすきうらさりやうのさふとさひしうへの月をたつ

百首歌奉りしに　厳安門院小宰相

かのつらさはいやとも今はつらからぬこのうへやまさるらん

関白右大臣

涙ちかなみの袖こそ衰なれさてもなほ人の行末とは

左兵衛督直義

逢ことは絶ぬる中にあるまじき世の契りかはりそまさらひあれ

恋歌の中に

従三位盛親

人心おもはりまへ太うき世とはへりていとひあちなく

西園寺前内大臣女

恋わたる身をも衰と誰かいふらんうきさ人はつらき世なれ

式部卿恒明親王

忘らるゝせめてはかなひき恋しなむ我世の後は煙如とも

永福門院

いとひ行く我のゝ身をなからまかれと恋しかるこそとまるへき

なまくもりはてさめとつらきて今はしよりかはりそゆる

同院右衛門督

いかにしてかはる衰もえまさし人の心さる世を我もいとへて

朔平門院

寄雲恋

絶なれし昔にかへる雲の色はおも(よう)かけぬる夕暮そかなしき

觸物催恋といふ事を

永福門院

月乃秋まて雲ゐもみえ明しその世よおもふ時あれは

忘恋　　弾正尹邦省親王

忘らるゝ袖にかはらぬ秋の月みしよにかはる影ならめ

遇不逢恋乃心を　　前中納言定家

とひこし又あらむ世の月をまてとて命にのこる契りそ

宝治百首哥乃中に寄風恋　　従二位頼氏

ねさめより吹くる風のほとにても情とくらへつゝ恋さ
恋するよ　　藤原朝定

あすよりは木乃梢もしくふくよふにちれる花を見しこゝろ　　侍従澄朝

またひとつ後はいくよもすみぬらむしまの山の有明の月　　前参議家親

思ひあへ又かへるまのさき後は色ある花乃さかりなる哉

百首哥乃中に　　太上天皇

志られしなさ涙はうらみつる人よそへの見えける袖を
あひみも久しくなとせさりける女なりとく
つゝけれ　　前大蔵卿雅有

なとすゝしくそとりやまろつと猶よそにえはさしもと思けれ

なりぬる身絶けりこゝろ

相模

待つらん人をともなかりつるま庵さえかなといとし（さゝと）

藤原相如女に忘られゆく絶けるのちによみ侍る

つかはしける　よみ人しらず

我ためからうきをしらでぞなげかしいまてひは人を恨ん

返し　藤原相如

忘ねとこそ我も忘るゝ人に契らしは

大伴郎女に遣しける

中納言家持

夢にだにみえばこそあらめかくばかりみえずしあるは恋て（しねとか）

題しらず　読人不知

君によおそ冬しぬ玉の緒をあふ事に命をかへて惜しきを（かな）

人麿

しきたへの枕せし人ことゝへやその枕には苔おひにたり

花山院御製

今よりはおもひもこりぬまもすゝ月を人によねさしとも（かな）

はるゝし　よみ人しらず

思ふとも恋ふともあはむものなれやゆふ手もたゆくとくる下紐（堅）

恋ふのよ

西園寺前内大臣女

うらむとも今はしらしや忘らるゝ身をおもふ物を人にさへまし

永福門院

つれなさにつくし恨めしからぬもふと思出つゝそ恋ひそかなしき

伏見院御哥

鳥の行夕への空よそよ世には我もいそくかたはさためさ

なくさむる世にありやとたとる人待によこる月ゆきさそはれまよとや

ますかゆしきよし契けり人の待もおもさ

つれなさはわけさきる人よかりてよまちつる

京極前関白家肥後

さりとて猶よし人の恋よりも物忘せぬ身をそ恨る

題しらす

殷富門院大輔

あさし白ひのまくさ遊ハ独かゝるもおもひさらなむ

あえて久しくとはぬ人に五月五日に

つかはしける人にかはりて

永陽門院左京大夫

忘れしなからみし身のあやめ草我のみなかれねよねとも

恋御哥の中に

伏見院御哥

面影のとまらぬ夢によそれ心ともに人の行せる哀見えねと

永福門院

よそなりしその世よ人ハうきとも身ハおなしためしそかし

善成王

うき身にハ人をもおもひけやのこさましり身をなけきけりと思ふ

藤原宗光朝臣

恨しとわかうさをハしらしや果つそれなり後の世中そとの

百首哥奉し時恋哥

左近中将忠季

くるしきその世まてハの身より又後を思ひなつさき
思しらす

永福門院

人の捨し身を独身よとめて歌のこまつ果そひさしき

伏見院御時六帖題にて人々に哥よませさせ給けるに人ハ出てゆかふといふことを

新宰相

なそのつらしと思ひもとゝ道を人ハ偏にと哉のみとさらまし

述懐哥の中に

伏見院御哥

思ひてもとうさも身もいとかり世ハおなしよの身かなりけみよ

今出川前右大臣實

とハさみをたしさりしハ人ハ人をも身をも思ふさかや

藤原隆信朝臣

うき身にハ身をもいとひし世中におなしハそ人をもよそにも見る

題しらす　前中納言為相

あらいそにかゝらん身はおしむ世のふることの葉

恋哥あまたよみ侍けるに　従二位為子

たのみありてまちしよりまての恋しさよそれも昔の夕暮

絶恋の心を　永福門院

つねよりも哀なりしとおもひそふこの世ならてはまよひにさそ恋し（さまよ）

千五百番歌合に　源家長朝臣

憂つらしおもふ世にたにとおもふ身の行ゑかはよやそゝかん

恋哥の中に　崇徳院御哥

なくさめの哀を人のとへかしと世をみ時よりこえ（？）の人

従二位宣子

たのつらきにひや出つとらりはてならくさめもこそそれ年月

建長二年八月十七日庚申歌合に絶

久恋　前大納言為氏

こひしれぬ人のためにはひるとていけかわりの年月そうき